

あらすじ

山の奥の又その奥にすむじっさとぼっさは瓜子姫っ子と三人暮らし。そこへ今朝も木こり（ソマ）の権六さがお茶のみにきて「ヤマチチと出会った話」をひと語りと、じっさ、ぼっさは町へ買い物に、権六は山仕事に出かける。家では瓜子姫がいつものようにうたを唄いながら機（はた）を織っている。ふときこえるアマンジャクの声。急にアマンジャクにいたずらがしたくなり「アマンジャク——」と何回も呼びます。すると、アマンジャクが近づいてきて、やがて戸を開けて入りこみ瓜子姫を柿の木にくくりつけ、瓜子姫に化けてじっさ、ぼっさを食い殺そうと待っている。

町から戻ったじっさ、ぼっさ。アマンジャクとは知らず、二人でヤマチチとアマンジャクのまねをして瓜子姫をおどかそうとする。その奇妙なやり合いの最中、トンビとカラスとニワトリが「瓜子姫がアマンジャクに柿の木に縛られているから、早く助けて」と鳴きだす。ことのなりゆきを知ったじっさは棒でアマンジャクをなぐり殺そうとするので、遂にアマンジャクも逃げ出した。

今日も瓜子姫は唄いながら機を織っています。その布が織り上がったなら、それを着物に仕立て、瓜子姫はお嫁にいくのです。



瓜子姫っ子
アマンジャク
(二役)

栗原 香林



じっさ

嶋田 堅二



ぼっさ

有田 和美

『劇団いこら』のラスト公演「役者として舞台に立てることを大空光栄に思います。楽しんでみて下さい!!」(劇団)

ぼっさです。『劇団いこら』として最後の公演です。頑張ります。もういじやあります。どんなぼっさになりますか。演出を通してあめのも最後です。さびしいー(劇団)

『瓜子姫とアマンジャク』と「劇団いこら」

栗原 省 (劇団いこら代表 演出)



『瓜子姫とアマンジャク』は木下順二さんが書いた芝居(もとほ放送劇)です。木下さんは若い頃、日本の民話の面白さと日本語の方言の魅力にひかれて数多くの「民話劇」を書きました。『夕鶴』もその代表作で、私達も何回か公演しました。『瓜子姫とアマンジャク』は、木下民話劇のエッセンスを集めた、シンプルで、詩情ゆたかな名作です。

私が「劇団いこら」をつくったのは一九六四年(昭和三十九年)で、今年で足かけ四〇年になります。

その頃は高校演劇を指導しながら、別の劇団をつくっていましたが、当時は今とちがって、部落差別という人権問題、が大変ひどく、私の友達もそのため自衛隊内で毎日いじめられていました。自衛隊とが軍隊とが「真空地帯」といわれ、大空秘密主義でそのことが外部に知られないように隠していました。「信木山自衛隊差別事件」)

私は友人が隊内で集団的な差別(いじめ)をうけ、そのために気がおかしくなりそうなる様子にびびり、その事実を早く彼に知らせ、世論の力で彼を助けてもらいたいと願って急いで「涙とラッパ」という芝居を書き、大勢の青年とそれを劇化して和歌山県内や京都など各地で足かけ三年間公演してまわりました。それが「劇団いこら」のはじまりです。それからは「劇団いこら」は、部落差別という人権問題(今は「同和問題」と呼んでいます)にとりこみ劇団として全国に知られるようになりまし

た。『劇団いこら』は差別をテーマにした芝居のほか、木下順二さんの民話劇や私の書いた『伝説姫ヶ池』『河童伝説文』などの民話劇をさかんに公演しました。とくに

